

序 『ドン・キホーテ』とアウトサイダー

優しく(易しく)見える『ドン・キホーテ』——踏み込ませない内部

一六〇五年に前篇、一六一五年に後篇が出た、ミゲル・デ・セルバンテス (Miguel de Cervantes Saavedra : 1547-1616) による小説『機知に富んだ郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』(El ingenioso hidalgo Don Quixote de la Mancha) が、大多数の日本人にとって「名前だけは知っているが、通読したことがない古典的名著」というあまりにたくない称号を冠したまま、四百年以上が経過した。日本、スペイン両国にとって激動の四世紀が過ぎた今も、日本人にとって『ドン・キホーテ』のイメージは、「頭のおかしい中年男が、風車に突撃して惨めに転げまわる図」から脱却し切れていない。その理由はどこから来るのであろうか。

日本にとってスペインは、二十一世紀になった今でも遠い国である。「スペイン」と聞いて日本人の頭に去来するのは闘牛にフラメンコ、情熱の国というステレオタイプ的造型であってみれば、スペイン人にとって「日本」はフジヤマ、芸者、サムライといった、これまた使い古された铸型ばかりである。つまり、日本とスペインが国交を開いてから四世紀、ちょうど『ドン・キホーテ』発刊後四百年の時期と重なるこの期間、日本もスペインも両者共

に相手を学び、歩み寄る努力をしなかったということだ。そんな両国がたった一冊の書物を相手に学問的な格闘を繰り広げるなど、望むべくもない。

もう一つの理由は、『ドン・キホーテ』という小説が意外にも、あまり読者に優しくないことが挙げられる。スペイン文学者清水憲男は、『ドン・キホーテ』後篇出版四百年記念に捧げられた秀逸なエッセイの中で、こう述べる。

断るまでもなく文学作品は研究者や評論家のためではなく、いわゆる読書好きのために書かれるのを第一義とする。なかでも『ドン・キホーテ』は、その内容の奥行きや多義性はさておき、決して難解な書物ではなく、読者にとって限りなく「やさしい」。この場合の「やさしい」は「易しい」と「優しい」を兼ねる。³⁾

清水は続けて、『ドン・キホーテ』は、「どうぞ近くまで来て、ゆっくりと御覧になってください」と読者をいざなう小説である、と指摘する。更に、いわゆる「文学者」にも、そして一介の「読者」にとっても優しく、そして易しい『ドン・キホーテ』の魅力は、ロマネスク絵画にも通じると述べる。

確かに、『ドン・キホーテ』は決して敷居の高い書物ではない。日本人もスペイン人も、特に原典に当たったわけでもないのに「あいつはドン・キホーテ(的)だ」というような言い方ができることが、『ドン・キホーテ』の親しみやすさを物語っている。加えて、ドン・キホーテとその忠実な従者サンチョ・パンサは、どちらかと言うと馴染み深い三枚目のキャラクターである。日本のアニメ『ドラえもん』の親しみやすさと同様、日本の、あるいはスペインのどこかで今も得意げに演説をぶっつけてもおかしくないような人物、それがドン・キホーテである。⁴⁾ 要するに、ドン・キホーテ主従は日本人にもスペイン人にも馴染みやすい人柄を備えているということだ。彼らは清水が指摘するように、優しく、そして易しく我々にも、そしてスペイン人にも接してくれる。

『ドン・キホーテ』自身の中にも、「さあ、私は優しい（易しい）ですよ」と読者を大きく包み込む台詞が散見される。例えば後篇第三章で、学士サンソン・カラスコがドン・キホーテ主従に向かって言う。

「だって記述は平明そのもので、理解に苦しむようなところなどまったくないんですからね。ですから、子供たちでさえページを繰り、若者は読み、大人は納得してうなずき、老人は称賛するといった具合です。〔……〕早い話が、あの物語は今日までに世に出た最も楽しい、しかも最も害のない読み物といえますが、それはあの本のどこを開いても、ふしだらな言葉ひとつないどころか、カトリックの精神にもとるようなことなど、片言隻句たりとも見あたらないからですよ。」
(六八―六九頁)^③

セルバンテスは、老若男女が楽しんで読め、しかも教育的・宗教的・啓蒙的効果があると自書を絶賛する。実際、害があるとなかろうと、あるいは「ふしだらな言葉」があろうとなかろうと、『ドン・キホーテ』はただそこにあり、読者に紐解かれ、読まれるのを静かに待っている、静謐な書でもある。

だが、真剣に『ドン・キホーテ』と腹を割って話し合おうとすると、作者セルバンテスは、東洋の知ったかぶりである我々を嘲笑うかのように、様々な解釈を読者に叩きつける。「さあ、どうぞ」と手を差し伸べる聖母のような優しさは、少なくとも私にとっては微塵も感じられない。このような読み方もある、こんな解釈もある、と変幻自在に変化球や直球を投げてくる敵チームのエースピッチャーに変貌するのだ。それが『ドン・キホーテ』の憎らしいほどの魅力でもある。

当然のことながら、十七世紀初頭のスペイン人にとっては、皮相的に見れば『ドン・キホーテ』はとっつきやすく、大笑いできる「喜劇の書」であっただろう。だが、時代が下っていくにつれて、『ドン・キホーテ』の解釈は様々に変化していく。十八世紀のイギリスで始まった『ドン・キホーテ』再評価の運動は、道徳の書、風刺の書と

いう見方を導入し、十九世紀のロマン主義者の解釈を経て「啓蒙の書」「悲劇の書」「狂気の書」といった千変万化する視点を生むことになった。このような多面的な書を読み解こうとする我々にとって、『ドン・キホーテ』が易しい（優しい）わけがない。

こうして、外部的な要因である「日本のスペインに対する無理解」という側面と、内部的な要因である『ドン・キホーテ』の（特に日本人にとっての）難解さ」という側面によって、『ドン・キホーテ』は遠い国のスペインと同じく、我々にとって遠い書物となった。人を優しく誘うように見せかけておきながら、その内奥に入り込ませないような頑なな特性が、この書物にはある。それは、『ドン・キホーテ』が「狂気の書」であると同時に、孤高に生きる「アウトサイダーの書」でもあるからだ。

アウトサイダーの書『ドン・キホーテ』——その魅力と孤高性

「アウトサイダー (outsider)」は、「インサイダー (insider)」即ち「内側にいるもの」の対立概念で、「疎外者」や「余所者」と同義である。しかし、ただ単にある社会の「外側」にいただけでアウトサイダーになるわけではない。評論家の福田恆存（一九二二—一九九四）は、コリン・ウィルソンの『アウトサイダー (The Outsider)』の解題で、以下のように敷衍する。⁶⁾

なるほど、かれは「外側にいるもの」には相違ないが、それは、内側にもぐりこみたいのにはじきだされたからではなく、みずからの意思で内側を拒否するからである。かれは秩序としての内側を拒否する。秩序を信じないのではない。現存の秩序を信じないのである。〔……〕かれはまた自分自身にたいしても、その「外側にいるもの」なのである。なぜなら、自分のなかには、つねに「インサイダー」の秩序どおりに動くものがあるからである。それを私たちは自己の俗物性と呼ぶこともできる。

福田の卓越した解説に従えば、アウトサイダーは自らの意思でインサイダーを拒絶するが、自己の中にもインサイダーを持っている。そして、自己のインサイダーからも遠ざかろうとする性質、それがアウトサイダーの真髄である。

ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse : 1877-1962) の『荒野のおおかみ (Der Steppenwolf)』の主人公ハリー・ハラ―は、街を散策する中で次のように述懐する。

実際、もし世の中が正しいとするならば、カフェーの音楽や、大衆娯楽や、あんなに安直なものに満足しているアメリカ的な人間が正しいとするならば、私はまちがっており、気が狂っている。そうだとすれば、私はしばしば自称しているようにほんとに荒野のおおかみだ。自分に無縁な、理解できない世界に迷いこんで、故郷も空気も食物もはや見いださぬ動物だ。

『ドン・キホーテ』のドン・キホーテ主従は、まさに福田が使う意味での、あるいはヘッセのハリー・ハラ―のよくなアウトサイダーである。これは、ドン・キホーテが騎士道物語を読んだことが自発的ならば、騎士道の中に理想を見出したことも自発的であり、即ち狂気に陥ったことも自発的だという命題に帰結する。ドン・キホーテ（主従）は、周囲の人間から「あなたは気が狂っている」と言われても、自分を省みることも、反省することもなく、ただ己の信念にのみ従って槍を振るい、幻想の戦いに身を投じる。

ドン・キホーテには信頼できる仲間がたった一人しかいなかった。それは、物語の序盤から最後まで旅を共にする農夫サンチョ・パンサである。妻と娘がいたにもかかわらず、サンチョの最大の理解者もまた主人ドン・キホーテである。この二人は心理的に決して離れることなく、忠誠心と愛情で結びつき、それ以外の「他人」が彼らの間

に介入することをひどく嫌った。ある意味で、彼らは二人だけで完結する「社会」、その他の人々には決して認められない、二人だけで構成された社会の成員だった。

彼らは孤独に歩む。仏陀は『感興のことは (Udanavarga)』の第十四章「憎しみ」の中でこう述べる。

もしもつねに正しくこの世を歩んで行くときに、明敏な同伴者を得ることができたならば、あらゆる危険困難に打ち克つて、こころ喜び、念いをおちつけて、かれとともに歩め。
(法句經 (Dhammapadam) 三二八)

愚かな者を道伴れとすることなかれ。独りで行くほうがよい。孤独で歩め。悪いことをするな。求めるところは少なくあれ。——林の中にいる象のように。⁽⁸⁾
(法句經 三三〇)⁽⁹⁾

悟りを得た仏陀は孤独に布教した、究極のアウトサイダーである。彼は「林の中にいる象」の如く、求めず、悪事を働かず、そして神と化した。しかし、仏陀は完結した自己の社会に存し、人から積極的と同列に扱われず、結果として放浪した。ドン・キホーテ主従もまさに仏陀である。サンチョという思慮深い伴侶を得たが、それ以外の人物たちは彼にとつて騎士道を理解しない「愚かな者」であった。彼が求めたのはたった一つ——騎士道の体現であり、まさに「求めるところは少な」かった。そして、サンチョ以外の道連れを求めず、社会から理解されることを欲さず、ただ己の信念のままに突き進む。

このことは、ドン・キホーテ主従がひどくエゴイストであり、かつ心底では「他人に理解されなくとも良い」と開き直っていることを強烈に示唆する。そのような「身勝手な狂人」ドン・キホーテの活躍を描いた書物が、身勝手ではないはずがない。読者は、主人公の勝手気ままな理屈や論理に付き合わされる羽目になる。その結果、彼らの言動の背後にある思想や行動原理を真剣に探究しようとする者を、主従は未知なる迷宮にいざなう。十七世紀初頭

のスペイン人が『ドン・キホーテ』を読んで浮かべた笑いとは、自分たちの社会的立ち位置の不安定さと大國スペインの龐顔の足音を間近に捉えた上での、アイロニーとペーソスが備わった自虐的な笑みだったのかもしれない。

こうした「笑い」を現代の日本人は直接知る由もないし、また、当時のスペイン人も強烈に意識していたわけではないだろう。先にドン・キホーテ主従を「親しみやすいキャラクター」と評したが、それは「腹藏なく腹を割って話し合うことのできる、懐の深い人物」をただちに意味しない。小説としての『ドン・キホーテ』も、登場人物としての「ドン・キホーテ主従」も、最初こそ近づいてくるどんな人々も分け隔てなく受け入れてくれるが、本當に心の奥底に到達しようとする、するりとウナギのように逃げてしまふ、実に謎めいた存在なのだ。

いざという時に接近者を隔離し、人を拒絶するような姿勢は、アウトサイダー的なものの特徴の一つである。S F ホラー作家ラヴクラフト (Howard Phillips Lovecraft: 1890-1937) が一九二六年に発表した『アウトサイダー (The Outsider)』という短編では、城を出ると人々が逃げ惑うことに驚愕し、ガラスに映った自分の醜さに絶望する主人公が描かれている。

そいつがどのようなものであったかは、漠然と記すことすらできぬ。不潔で、不気味な、歓迎されざる、畸形の、忌むべきものの具現であった。腐敗、老廃、荒寥の幽鬼めく影、慈悲深き大地が常に秘め隠しておくべきものの凄絶な露呈たる、吐気もよおす、腐汁したたる妖怪であった。¹⁰⁾

アウトサイダーの心底は、その他の人々にとっては「漠然と記すことができず」、「歓迎されない」、「秘め隠しておく」、「妖怪」のようなものである。事実がどうあれ、少なくとも局外者や周縁者、余所者と呼ばれるような「アウトサイダー的人々」は、自らの心を探ろうとする不埒な人々をそのように認識するし、あわよくば自分の本質こそが「妖怪である」と信ずる。

ドン・キホーテにとって、自分の正気を犠牲にしてまで信じた「騎士道物語の理想」を壊そうとするような輩は、それだけで「腐汁したたる妖怪」である。だからこそ彼は、騎士道物語を馬鹿にするような人々に対しては容赦のない一撃を加えようとする。そして、騎士道物語を盲信するドン・キホーテに付き従うサンチョ・パンサもまた、「狂人であるアウトサイダーを愛し、彼に追隨する」という理由でアウトサイダーである。

彼らの愛嬌を世界に広めたことで「世界最高の文学」に選出されているとはいえず、一見滑稽で、世界に誇る愛らしいコンビを描いた『ドン・キホーテ』は、奥底をなかなか見せないたたかな書物である。それは、アウトサイダーであった彼らが「騎士道物語の世界」で生きるために必要であったし、また、孤高の作家セルバンテスが自らの矜持を示すためにも不可欠であった。

セルバンテスの生前は決して恵まれたものではなく、常に同時代のライバルにして大作家ロペ・デ・ベガ (Lope de Vega: 1562-1635) の後塵を拝していた。そんな彼がアイロニーに自己の逃げ道を見出し、斜に構えた不良少年のような眼差しで人々や世界、そして社会を見て、受容し、そして拒絶したとしても驚くには当たらない。つまり、ドン・キホーテ主従と同じく、作者セルバンテスもアウトサイダーであったということだ。

アウトサイダーなのは作者セルバンテスだけではない。覇権を握ったかに見えたスペインも、次第にその栄光を過去のものとしていくにつれて、世界の周縁者に落ちていく。とどのつまり、『ドン・キホーテ』は内部的にも、そして外部的にも、アウトサイダーの特徴を極めて多く保持しているのである。

本書の構成——アウトサイダーであること、社会人（インサイダー）であることの文学的比較

本書では、ドン・キホーテ（主従）、あるいは小説『ドン・キホーテ』がどのようにアウトサイダーであるのかを、主に他の文学作品との比較を通して検討する。まず、第一章では「アウトサイダーとは何か」という点を論じ、それと『ドン・キホーテ』との関連について見ていく。第二章から第九章までは、文学作品などの「文学」や、ア

ニメ、漫画などの「サブカルチャー」と『ドン・キホーテ』を比較し、両者の共通項である「アウトサイダーぶり」を見ていく。具体的には、第二章で藤子・F・不二雄の作品との比較から「英雄としてのアウトサイダー」について、第三章で漫画『ヒョンヒョロ』を通して、常識と非常識の境界に関して検討する。第四章から第八章までは、いわゆる「海外文学」と『ドン・キホーテ』との比較論である。それぞれ、第四章と第五章ではサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』と、第六章と第七章ではカミュの『異邦人』と、第八章ではカフカの『審判』と『ドン・キホーテ』を比較し、そのアウトサイダーぶりを明らかにしていく。最後の第九章では、スペイン発のアニメ『しわ』と『ドン・キホーテ』の比較研究を試みる。

『ドン・キホーテ』の解説書は国内・海外を問わず数あれど、類書と本書との最大の違いは、サブカルチャーと思われるアニメや漫画との比較を積極的に取り入れていることである。実際、アニメや漫画は文学研究では等閑視されがちであり、その名の通り「サブ（下位）」の地位に甘んじることが多かった。だが、アニメや漫画も物語的文学性を豊穣に備えている以上、発表形態が絵（イラスト）や動画（動くイラスト）であったとしても、軽視して良い論理的な根拠はない。

もちろん、そうした「サブカル」の作者たちが『ドン・キホーテ』を常に意識していたわけではないだろう。その点に関しては、スペインが誇る哲学者ウナムーノ（Miguel de Unamuno : 1864-1936）の著書の第二版の序文を引いて、「言訳」の代わりとした。

〔……〕本書『ドン・キホーテとサンチョの生涯』が『ドン・キホーテ』の自由かつ個人的な解釈書であること、本書の中で私が意図しているのがセルバンテスの与えんとしていた意味ではなく、私自身が与える意味を発見することであって、博識な歴史的研究でないことに負っていると考えるのは私の喜びとするところである。

Unamuno (1938 : 4)

ある人物がある著書について著者の代わりに論じることは、その著者の意図を飛び越えて著書が一人歩きしていることを同時に含意する。そしてその「一人歩きする文学」がどの道を辿るかは、究極的には個々の読者に委ねられている。世間で「名作」や「古典」と称されておりながら読われている文学が、時に自分にとってくだらなく愚劣なものと感じられるのはある意味では必然である。そうした解釈上自分勝手な文学作品に対して何らかの意思表明ができること、あるいはその文学作品から何らかの啓示や感動を受けること、それはドン・キホーテと同じく、ひどく気ままな一面を持っている。つまり、ある文学作品から「最大公約数的」解釈は引き出せるかもしれないし、そのような試みは非常に有益ではあるが、その最大公約数からこぼれ出る「解釈」もまた、尊重すべきものであると同時に個人的なものであると思われる。文学論とは、時としてひどくわがままで、自分勝手な振る舞いを見せる危険を内包しているのである。

『ドン・キホーテ』が世に出るからのインパクトは計り知れず、純粹な文学だけではなく芸術、思想といった「お堅い」分野から、アニメや漫画といった「ソフトな」サブカルチャーにまで等しく影響を及ぼしている。本書によって、その中からほんの一端でも「ドン・キホーテの影」をすくい上げて考察できればと思っている。そもそも、相手が一筋縄ではない『ドン・キホーテ』なのである。こちらにも上位や下位などの「文化の序列」を気にしているのは太刀打ちができない。比較対照して論じるには、自分たちが持っている文化と細々とした知識を総動員して取り組む必要がある。そして、後世の人々が本書と同じように『ドン・キホーテ』と様々な文化を比較研究することによって、この十七世紀初頭の小説の唯一性が高められ、更に「アウトサイダー」の高みに押し上げる原動力ともなるだろう。